硬い芯の鉛筆を用いた感情減衰バイアスに関する実験*

小野由莉子[a]　松井亮太[b]

要約

感情減衰バイアスは，過去の出来事を思い出す際に，ネガティブな感情よりもポジティブな感情のほうが，時間の経過とともに薄れにくい，あるいはむしろ強調される傾向があるという心理的現象である．本研究では，山梨県立大学の学生を対象にした，硬い芯の鉛筆の使い心地を評価してもらうという実験を実施し，感情減衰バイアスが被験者にどのような影響を与えるのか分析を行った．その結果，感情減衰バイアスの効果の発揮には時間差があり，かつ，限定された期間で一時的に強く発揮するということが明らかになった．

JEL 分類番号： C90, D12, D30

キーワード：感情減衰バイアス，評価，効果

---

* なお，本論文に関して，開示すべき利益相反関連事項はない．

[a] 山梨県立大学 国際政策学部 ono-hbb@yamanashi-ken.ec.jp

[b] 山梨県立大学 国際政策学部 r-matsui@yamanashi-ken.ac.jp

本研究は JSPS 科研費 JP24K16447 の助成を受けている．

1. イントロダクション

感情減衰バイアス（Fading Affect Bias）は，自伝的記憶想起時の不快感情は快感情よりも早く薄れるという現象である（Walker et al.，2003）．例として，レストランで店員が顧客に料理の不備や無礼などの失敗をした後，謝罪や補償などのサービス回復行為を行った場合，それを行わなかった場合に比べて，顧客のレストランに対する評価や口コミの内容がポジティブな傾向になるということが明らかになっている(Kim & Jang.，2014)．本研究では，山梨県立大学の学生の協力を得て，硬い芯の鉛筆の使い心地を複数回にわたって評価してもらうという実験を行い，時間の経過とともに感情減衰バイアスが鉛筆の評価にどのような影響を及ぼすのか分析する．加えて，どのような条件や環境で感情減衰バイアスが働くのかを明らかにする．

2. 実験

2.1. 実験の概要

実験は，山梨県立大学の学生を対象に実施した．

実験では，被験者に 4H の鉛筆（トンボ鉛筆 鉛筆 4H MONO J （超微粒子芯採用）1 ダース MONO-J4H）を使用してもらった．鉛筆は，H の数字が大きいほど，薄く硬い芯であることを示す．一般の筆記用に用いられる鉛筆を H とすると，4H はかなり硬い芯である．その鉛筆で「行きたい国５つ」,「行きたい県５つ」などを書いてもらい，その直後に鉛筆の使い心地を 0（使いにくい）から 10（使いやすい）の 11 段階で評価してもらった．加えて，鉛筆の使用から 6 時間後，１週間後，3 週間後，6 週間後に同一のシートを用いて評価をしてもらい（図１），評価の変化を分析した．

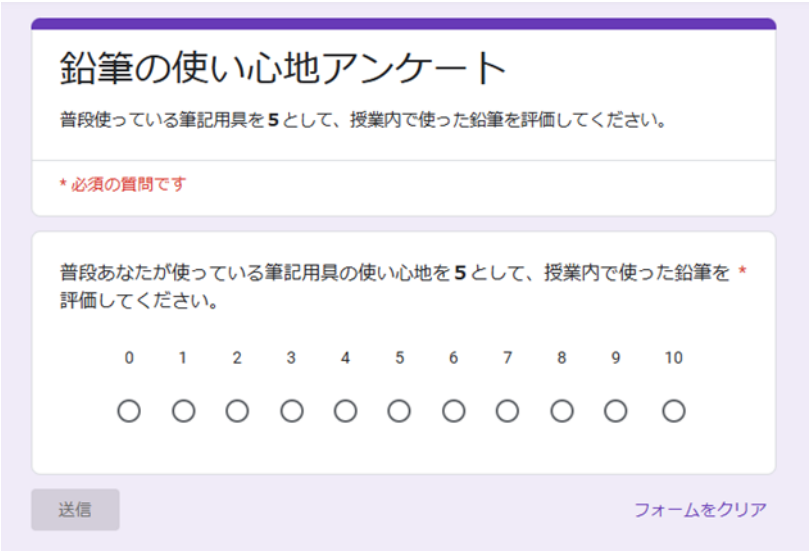

図 1　鉛筆の使い心地評価フォーム

2.2. 実験 1

実験 1 では,「使用直後の評価に比べて 6 時間後の評価のほうが評価の平均値が上がる」という仮説をたて，それに基づき実験を行った.

4H の鉛筆を使用してもらった後，学生を学籍番号が奇数か偶数かで分け，奇数の学生 49 人に鉛筆の使い心地を評価してもらった．その 6 時間後，改めて使い心地を評価してもらった.

2.3. 実験 2

実験 2 では，「数週間と時間が経つにつれて評価の平均値が上がる」という仮説をたて，それに基づき実験を行った.

1 週間後に 90 人に，3 週間後に 89 人に，6 週間後に 88 人に，改めて評価をしてもらった．なお，このうち一度でも実験に協力しなかった被験者は除外している.

3. 結果

3.1. 実験 1 の結果

図に実験結果を示す（図 2）．奇数学生の直後の評価の平均値は 1.63，6 時間後の評価の平均値は 1.59 となった．評価の有意差について示す．使用直後の評価と 6 時間後の評価の統計分析の結果は P＞0.05 で，これらの間に統計的に有意な差はなかった.

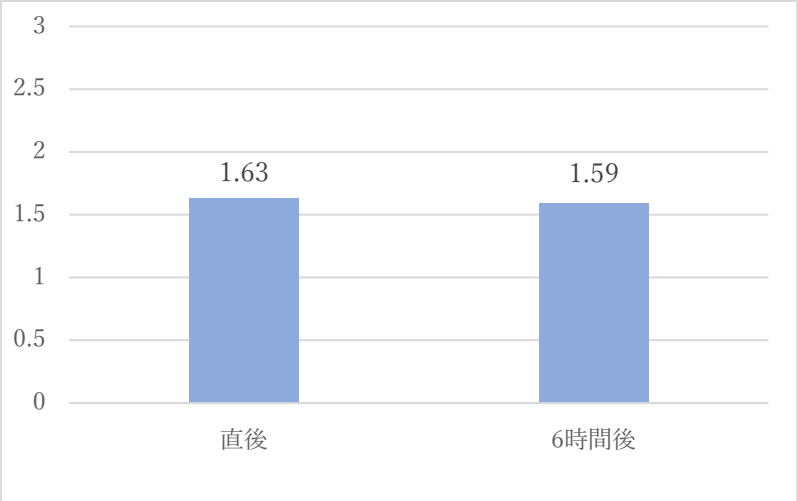

図 2　実験 1 の結果

3.2. 実験 2 の結果

図に実験結果を示す（図 3）．6 時間後の評価の平均値は 1.59，1 週間後の評価の平均値は 2.20，3 週間後の評価の平均値は 2.30，6 週間後の評価の平均値は 1.79 となった．それぞれの評価の有意差について示す．最初の使用から 6 時間後の評価と 1 週間後の評価の統計分析の結果は，P＜0.05 で，これらの間には統計的に有意な差があった．1 週間後の評価と 3 週間後の評価の統計分析の結果は P＞0.05 で，これらの間に統計的に有意な差はなかった．6 時間後の評価と 3 週間後の評価の統計分析の結果は P＜0.05 で，これらの間には統計的に有意な差があった．3 週間後の評価と 6 週間後の評価の統計分析の結果は P＜0.05 で，これらの間には統計的に有意な差があった．

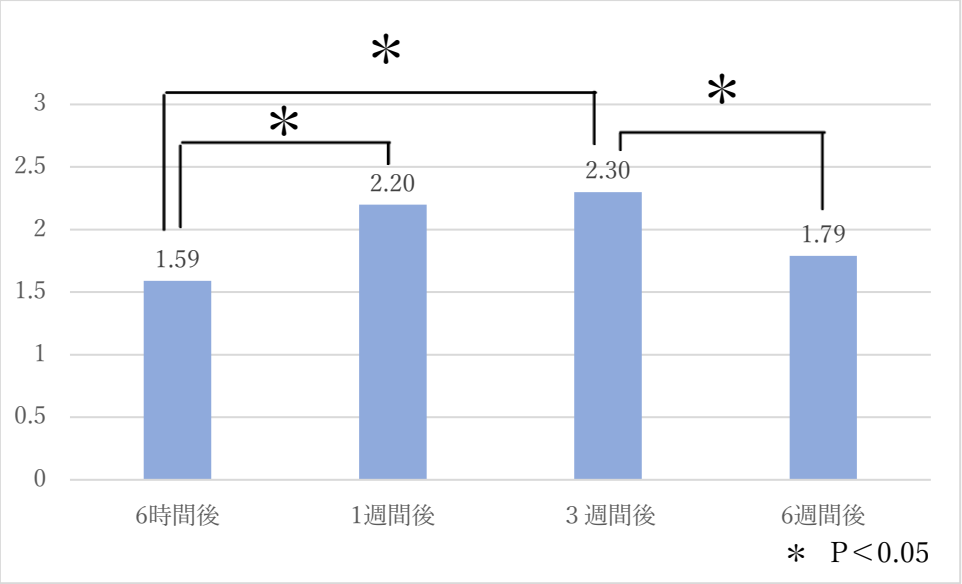

図 3　実験 2 の結果

4. 考察

実験 1 の直後の評価の平均値が 1.63，6 時間後の評価の平均値が 1.59 であり，これらの結果に統計的に有意な差が見られなかったということから、この実験では仮説を支持する根拠を得ることができなかったといえる．この実験で，感情減衰バイアスの効果が見られなかったことには，評価の際に同一のフォームを使ったため，被験者が以前の評価を記憶していたことが原因として挙げられる．

実験 2 で，評価の平均値が 3 週間後に最も高くなったことから，感情減衰バイアスはしばらくして効果を発揮すると推測できる．また，3 週間後の平均値と 6 週間後の平均値の間に有意差が生まれたことから，3 週間後の評価の平均値 2.30 から 6 週間後の評価の平均値

1.79 への減少は偶然やランダムではないといえる．これにより，使用直後から 3 週間後までの 3 週間という限られた期間で感情減衰バイアスが強く働き，3 週間後から 6 週間後までの 3 週間で感情減衰バイアスの働きが弱まっていったと考えられる．

5. 結論

本研究により，感情減衰バイアスの効果の発揮には時間差がある，効果は一定に発揮されるのではなく，限定された期間（今回の実験における 3 週間）で一時的に強く発揮するという，大まかな傾向が明らかになった．一方で，仮説を支持する結果を得られなかった点もあった．こうした点を踏まえて，感情減衰バイアスを用いたより発展的な研究を行っていく必要性があると考えられる．感情減衰バイアスを用いた実験は少数であるため，条件や環境を変えたさまざまな実験を行い，得られたデータを収集し分析することで，感情減衰バイアスについて未だ解明されていないその性質をより明らかにしていくべきである．

引用文献

Kim, J.-H., & Jang, S. C. 2014. The fading affect bias: Examining changes in affect and behavioral intentions in restaurant service failures and recoveries. International Journal of Hospitality Management, 40, 109–119.

Walker, W. R., Skowronski, J. J., Gibbons, J. A., Vogl, R. J., & Thompson, C. P. 2003. On the emotions that accompany autobiographical memories: Dysphoria disrupts the fading affect bias. Cognition and Emotion, 17, 703–723.